

て、到底相及ばぬのは、まことに是非もないことである。全篇は四段に分れ、憶昔嬌小姿から、何曾在郷土に至るまでが第一段、去年下揚州から恨君情悠悠に至るまでが第二段、東家西舍同時發から紅妝二八年に至るまでが第三段、一種爲三人妻から君去容華誰得知に至るまでが第四段、意義は、層層遞下して居る。胡震亨は、この詩の後に附記して「江夏行、長干行、竝に、商人の婦の詠たり。而して、その源、西曲より出づるに似たり。蓋し、古しへ、吳俗、賈を好み、荆鄂樊鄧の間、尤も盛に、男女怨曠哀吟、清商諸西曲の由つて作るところなり。第だ、其辭は五言二韻、節短くして、情、未だ盡さざるあり。太白、襄漢金陵に往來して、その人情土俗を悉す、因つて、采つて之を演じて、長什となす。一は長干より巴峽に上り、一は、江夏より揚州に下り、以て行賈者の程を盡し、而して、その家人失身誤嫁の恨、盼歸遠望の傷を言ひ、かの之を謳吟するものをして、その末を逐うて軽く離るるの悔を動かすに足らしむ。その才思、以て之を發するに足ると雖も、事に踵いで以て華を増すは、西曲本辭より得來る。才を取る、もとより在るあるなり。凡そ太白の樂府、皆泛然として獨造するに非ず、必ず本曲の詞と借用するところの詞とを參觀し、はじめて、その源流の自、點化奪換の妙を知らる。ひとり、この二篇のみ然りと爲さず、聊か發凡し、以て讀者の觸解に資すと云ふ」とあるが、極めて、穩妥なる見解である。それから、乾隆御批には「怨別の情を曲盡し、絮絮として聽くべし、豈無膏沐、誰適爲容、末句、この意を用ふ」とある。豈無は詩經の句で、結二句、即ち如今正好同歡樂、

君去容華誰得知は、恰も其意を承けて、更に新意を發したものだといふのである。

懷仙歌

仙を懷ふの歌

一鶴東飛過滄海。一鶴東に飛んで、滄海を過ぐ、
放心散漫知何在。放心散漫、知る何くにか在る。
仙人浩歌望我來。仙人浩歌して、我が來るを望む、
應攀玉樹長相待。應に玉樹を攀ちて、長く相待つべし。
堯舜之事不足驚。堯舜の事、驚くに足らず、
自餘囂囂直可輕。自餘囂囂、直に輕んずべし。
巨鼇莫戴三山去。巨鼇、三山を戴いて去る莫れ、
我欲蓬萊頂上行。我は蓬萊の頂上に行かむと欲す。

【字解】一 滄海 十洲記に滄海島は、北海中に在り、地方三千里、岸を去ること二十一萬里、海四面、島を繞る、各々廣さ五千里、水皆蒼色、仙人、これを滄海といふなり」とある。二 玉樹 拾遺記に「崑崙山に五色の玉樹あり、陰翳五百里」とある。三 巨鼇 前に見ゆ。

【題義】字面の通り、仙人を懷うて作つた歌である。

【詩意】一羽の鶴は、東に飛んで、滄海を過ぎ、翱翔自在であるが上に、その放心散漫として、一つ處

に留まることではない。仙人は浩歌して我が来るを望み、玉樹の枝を攀ち、青天を翹望して、ちつと待つて居るのであらう。堯舜禪讓の事などは、少しも驚くに足らぬし、その他、俗人どもが、がやがや八釜しく言つて居ることなどは、直に輕んじて、聞き棄てにして仕舞へば善い。聞けば、巨鼈は其頭に三山を戴いて居るといふが、その儘、どこかへ往つて仕舞へば、困まるので、われは、今、蓬萊の頂上に向つて飛んで往かうと思ふから、その間、しばらく、一つ處に住まつて居て呉れるといふのである。

【餘論】蕭士贇の説に「この詩、太白、宗國を瞻顧し、心を宗室に繫け、復た進用せられむことを冀ふの作なり。一鶴は自ら比し、仙人は人君に比し、玉樹は爵位に比す。時に肅宗、靈武に即位し、明皇就いて位を遜り、物議これを非とするものあり。太白は、豪俠曠達之士、亦た曰く、堯の舜に禪るに於る、古しへより之あり、何ぞ驚怪するに足らむや。彼これが爲に囂囂たるもの古今を知らず、直に輕んずべきなり、と。末句、その安史の滅、宗社の安に拳拳たり、もしくは我を用ひむか。身、江海に在り、心、魏闕に存す。白これあり」とあるが、かかる諷意ありとすれば、この作、遂に徒爾ならず、多分さうであらうと思はれる。

玉眞仙人詞

玉眞仙人詞

玉眞之仙人。時往太華峰。

玉眞の仙人、時に太華峰に往く。

清晨鳴天鼓。颺歛騰雙龍。

清晨、天鼓を鳴らし、颺歛、雙龍を騰らしむ。

弄電不輟手。行雲本無蹤。

電を弄して手を輟めず、行雲本と蹤なし。

幾時入少室。王母應相逢。

幾時か少室に入つて、王母、應に相逢ふべきか。

【字解】【一】太華峰 即ち華山、五嶽の一、華州華陰縣南八里に在る。【二】天鼓 道家で、齒を叩く法に色色あつて、中央上下相叩くことを天鼓を鳴らすと稱し、神明經に「もし存思念道致眞招靈の時は、當に天鼓を鳴らし、正中四齒を以て相叩き、口を閉ぢ、頰を緩うし、聲を虚にして深く響かしむべし」とある。【三】少室 嵩山の一峰、元和郡縣志に「少室山は河南府告成縣の西北五十里、登封縣の西十里に在り、高さ十六里、周回三十里、潁水の源出づ」とある。【四】王母 前に數ば見ゆ。女仙の總大將で、太平廣記に「西王母は九靈太妙龜山金母なり、位、西方に配し、羣品を母養し、天上天下三界十方女子の登仙せし者、道を得たる者、咸 隸するところ」とある。

【題義】胡震亨の解に「玉眞公主は睿宗の女、字は持盈、太極元年、出家して道士となり、觀を京師に築いて、以て居る。魏顥言ふ、白、公主に薦達せらる、と。而して、白、亦た公主別館に宿する詩あり。この詞、豈に其れ公主に獻せしところのものか」とある。

【詩意】玉眞の仙人は、花萼尊貴の御身を以て道を修せられ、時時、長安を去つて、華山の絶頂に赴かれ、晴れ渡つた涼しき早曉に、齒を叩く法を行はれ、やがて身を躍らして、雙龍に跨り、飄忽として、天空の上を飛行せられ、手に電光を弄して、しばらくも止まず、しかも、その行方は、浮雲の蹤

なきが如く、到底捕捉する事が出来ない。かくて、中嶽嵩山の中なる少室の山に行かれたならば、仙女の總取締といふべき彼の王母が、定めて歡迎して、愈よ仙道を修得せられるであらう。そは何時の事であるか、いづれ程遠からぬ事で、清修超凡の高徳は、まことに、欽仰するに餘ある事である。

【餘論】この詩は、もとより格別の者でもなく、内容も淺近ではあるが、落想の上に、雄濶奇幻の處があるのが面白いと思ふ。蕭士贇は「竊かに意ふ、この詞は、必ず公主出家の時、時賢皆詩あり、以て其事を詠ず、仙人は褒稱なり」といつたが、李白は、公主に引立てられた縁故があるから、必ずしも、その時ではなく、魏顥の言の如く、唯だ折にふれて、公主に獻じたのであらう。

清溪行

清溪行

清溪清我心。水色異諸水。

清溪、我が心を清くす、水色、諸水に異なり。

借問新安江。見底何如此。

借問す、新安江、底を見る、何ぞ此に如かむや。

人行明鏡中。鳥度屏風裏。

人は明鏡の中を行き、鳥は屏風の裏を渡る。

向晚猩猩啼。空悲遠遊子。

晩に向つて、猩猩啼き、空しく悲む、遠遊の子。

【字解】(一) 新安江 元和郡縣志に「新安江は、歙州黟縣界より流れて、桐廬縣に入り、東流して、浙江に入る」とあり、蕭士贇の説に「圖經、清溪は宣城に屬す、新安は即ち今の徽州、唐に在つては歙州たり、隋に在つては新安郡たり。凡そ水源を徵に發するも前に見ゆ。

の、皆新安江といふ。欽よりするものは黟山に出で、休寧よりするものは率山に出で、績溪よりするものは太嶂山に出で、婺源よりするものは浙山に出づ。浙江より休寧を流るものは、灘たる三百六十。沈約に新安江水至清見底の詩あり」といつて居る。(二) 猩猩

【題義】清溪は池州に在つて、即ち宣城郡の近傍である、前に秋浦歌の項にも見えて居た。ここは、非常に水の清く澄んで居る處で、その清溪の有様を寫して、この一首と爲したのである。

【詩意】名にしおふ清溪の水に對すると、わが心までも、澄み渡る様な氣がする。天下に清水は多いが、この清溪に比較し得る水は、殆んど無い位。新安江は、非常に清くて、その底までも見えるといふが、それでさへ、恐らくは、この清溪には及ばないと思ふ。そこを通過する人は、さながら、明鏡の中を行くが如く、鳥は四山の屏風を爲せる内を飛んで行く。かういふ好い景色の處に逗留して居ても、夕暮に成つて、猩猩の聲を聞くと、遠遊を悲み、おもはず、傷心するのである。

【餘論】五六二句は、晝致あつて、一篇の精彩である。胡元任は「沈雲卿の詩、船如天上坐、人似鏡中行、王逸の語、謂はゆる山陰路上行、如下在鏡中、遊上の句に原づく、然れども、太白の此詩、人行明鏡中の二句、襲ふところありと雖も、語益す工なり」といつて居る。それから、乾隆御批には「佇興して言ふ、鏗然たる古調、一結、言、意を盡さざるの妙あり」といひ、併せて結句を賞して居る。

酬殷明佐見贈五雲裘歌

殷明佐が五雲裘を贈られしに酬ゆる歌

我吟謝朓詩上語。

我、謝朓詩上の語を吟すれば、

朔風颯颯吹飛雨。

朔風颯颯として、飛雨を吹く。

謝朓已沒青山空。

謝朓、すでに没して、青山空し、

後來繼之有殷公。

後來これに繼ぐ、殷公あり。

粉圖珍裘五雲色。

粉圖珍裘五雲の色、

曄如晴天散綵虹。

曄として晴天に綵虹を散ずるが如し。

文章彪炳光陸離。

文章彪炳として、光陸離、

應是素娥玉女之所爲。

應に是れ、素娥玉女の爲すところなるべし。

輕如松花落金粉。

輕きことは、松花の金粉を落すが如く、

濃似錦苔含碧滋。

濃かなることは、錦苔の碧滋を含むに似たり。

遠山積翠橫海島。

遠山の積翠、海島に横はり、

殘霞飛丹映江草。

殘霞、丹を飛ばして江草に映す。

凝毫採掇花露容。

凝毫採掇す、花露の容、

幾年功成奪天造。

幾年か、功成つて、天造を奪ふ。

故人贈我我不違。

故人、我に贈つて、我、違はず。

著令山水含清暉。

著すれば、山水をして清暉を含ましむ。

頓驚謝康樂。

頓に驚かす謝康樂、

詩興生我衣。

詩興我が衣に生ず。

襟前林壑斂暝色。

襟前には林壑、暝色を斂め、

袖上雲霞收夕霏。

袖上には雲霞、夕霏を收む。

羣仙長嘆驚此物。

羣仙長嘆して、此物に驚く、

千崖萬嶺相縈鬱。

千崖萬嶺、相縈鬱。

身騎白鹿行飄颻。

身は白鹿に騎して、行いて飄颻、

手翳紫芝笑披拂。

手に紫芝を翳して、笑うて披拂。

歌吟 酬殷明佐見贈五雲裘歌

相如不足誇鶴鶴

相如は、鶴鶴を誇るに足らず。

王恭鶴斃安可方

王恭の鶴斃、安んぞ方ふべけむや。

瑤臺雪花數千點

瑤臺の雪花、數千點、

片片吹落春風香

片片吹き落ちて春風香し。

爲君持此凌蒼蒼

君が爲に、此を持して、蒼蒼を凌ぐ、

上朝三十六玉皇

上朝す三十六玉皇。

下窺夫子不可及

下、夫子を窺ふも、及ぶべからず。

矯手相思空斷腸

手を矯げて、相思、空しく斷腸。

【字解】謝朓詩上語。謝朓の觀朝雨詩に朔風吹三飛雨、蕭條江上來の二句がある。【三】青山 原註に「謝朓の宅は、當塗青山の下に在り」といひ、江南通志に「青山は太平府城の東南三十里に在り、齊の宣城太守謝朓、かつて室を山南に築く、又謝公山と名づく、謝公井、白雲泉あり」といつて居る。【四】皦 光りががやく貌。【五】彪炳 色彩鮮明の貌。【六】素 素娥 謝朓の月賦に集素娥於後庭とあり。李周翰の註に「嫦娥、月に奔る、月色白し、故に素娥といふ」とある。【七】玉女 道を得たる仙人に天帝より遣して侍衛せしむる仙女。抱朴子に「玉女來り侍す、役使以て行廚を致すを得べし。玉女、常に黃玉を以て誌となす、大、黍米の如く、鼻上に在り、これ眞の玉女なり。この誌なきものは、鬼、人を試むるのみ」とある。【八】碧滋 草色の翠にして滋繁なるをいふ。【九】山水含清暉 謝靈運の石壁精舍還湖中の詩に、昏旦變氣候、山水含清暉、林壑歛暝色、雲霞收夕霏

といふ句がある。靈運は康樂公を襲封した。【一〇】雲霏 霏は雲の飛ぶ貌。【一一】翳 かげす。【一二】鷗鷺 西京雜記に「司馬相如、著くるところの鷗鷺裘を以て、市人楊昌に就いて酒を買ふ」とある。張華禽經の註に「鷗鷺は、鳥の名、その羽は、裘を爲り、以て寒を辟くべし」とある。【一三】鶴斃 「世説に孟昶、未だ達せざるとき、家、京口に在り、かつて、王恭が高輿に乗じ、鶴斃裘を披くを見る、時に微雪、昶、籬間に於て之を窺ひ、嘆じて曰く、これ眞に神仙中の人」とある。鶴斃は、鶴の羽を綴つて衣と爲したるもの。【一四】瑤臺 玉を飾としたる臺。【一五】三十六玉皇 即ち三十六天帝。【一六】夫子 殷明佐を指す。【一七】矯手 手を擧げる。

【題義】五雲裘は、五色絢爛、雲の如きが故に名づけたので、殷明佐といふ人が、それを李白に贈つたから、この詩を賦して、謝意を表したのである。

【詩意】われ試に謝朓の詩を吟ずれば、その詩の文句通りに、北風が颯颯として雨を吹いて來た。謝朓は、すでに没して、その曾て住んで居た青山にも、格別の人も居なかつたが、今日殷明佐といふ人が、そこに住んで、謝朓の風流を繼いで居る。その殷明佐は綺麗に色どりをした珍らしい五雲裘を持つて居るので、その光彩燦爛たることは、晴天に彩虹を散ずるが如く、色彩の配合は極めて、鮮明であつて、如何にも見事に且つ美しい。それは、到底、人間の手に成つたものではなく、月中の素娥、もしくは天上の玉女が作つたものと思はれる。その輕きことは、松花が金粉を吹き落すが如く、その濃かなることは、綺麗な苔が若草を濕して、その色が、はつきりと見えるが如く、又遠山の積翠が海島に横はり、消え残つた夕やけが、紅い色を發して、江草に映するが如くである。なほ仔細に觀ると、筆を

細に使つて、花に沍露の容を拾ひ集めたやうで、定めて幾年かの日子を積んで、やつと出来上り、かくは天造の工を奪つたのであらう。その五雲裘を殷明佐が我に贈つたから、われは、その好意に戻らず、あり難く頂戴したる後、これを着用すれば、山水をして益す清暉を含ましめる。それに就いて、詩興は滂渤として、わが衣襟の前に生じ、古しへの謝靈運をも驚かすばかり、その靈運の詩にも、林壑が暝色に斂まるとあるが、この裘の袖の上には、雲霞、夕霏を收めるといふやうな景色が繪いてある。つまり、この裘に物せる粉圖は、康樂の詩意に本づいたもので、これを著すれば、自然に詩興も湧き、又山水をして清暉を含ましめるので、詩人たる予に取つては、まことに似合しいものである。さて之を著用して、千崖萬嶺の間をめぐつて行くと、仙人どもも、いたく珍らしがつて驚く位、かくて、われは、飄飄として白鹿に跨り、紫芝を手を翳して、振り廻はし、しづしづと逍遙して居る。むかし、司馬相如は、鸛鷖裘を質に置いて酒を買つたといひ、王恭は鶴氅を著て居ると、孟昶が窺ひ見て、神仙中の人だといつて譽めたといふが、その鸛鷖も、未だ美を誇るに足らず、鶴氅とても、どうして之に比較することが出来やう。瑤臺には、雪花降りそそぐこと數千點、さながら、花びらが春風に吹き落されて匂ふかと疑ふばかり、その時しも君の好意に愛でて、この裘を著て、萬里の雲霄を凌ぎ、天闕に至つて、三十六天帝に朝調する。それは、まことに愉快の極であるが、ただ遠く此世と隔り、下に向つて、わが殷明佐の居る方を窺へども、到底よくは見えないので、手を舉げて、凝望しつづ、相

思の極、斷腸の想に堪へられない。

臨路歌

臨路歌

大鵬飛兮振八裔

大鵬飛んで八裔に振ひ、

中天擢兮力不濟

中天擢けて、力、濟はず。

餘風激兮萬世

餘風、萬世に激し、

游扶桑兮掛石袂

扶桑に游んで石袂を掛く。

後人得之傳此

後人、これを得て、此に傳ふ、

仲尼亡兮誰爲出涕

仲尼亡びたり、誰か爲に涕を出す。

【字解】一 八裔 八方に同じ。

二 游扶桑兮掛石袂 嚴忌の哀時命に、衣攝葉以儲與兮、左袂挂於搏桑とあるに本づく。

三 仲尼 孔子の字。

【題義】王琦の解に「李華の墓誌に謂ふ、太白、臨終歌を賦して卒す、と。恐らくは、此詩即ち是れ。路の字は蓋し終の字の譌ならむ」とある。なる程、これを臨終歌とすれば、何の造作もなく疏通し、その旨意は極めて明白である。

【詩意】大鵬が翼を搏つて飛び、その勢は、八方の碧落を振ひ動かすばかりであつたが、無残にも、中天に至つて、その翼が摧けて、どうしても、おのが力で救ふことが出来ない。大鵬の圖南の志は、まことに壯なもので、その餘風は萬世を激すべく、その翼は、丁度仙人が、袂を舉げて、扶桑までも蔽ふに似て居る。しかし、かういふ不運な憂き目に遇つては、今更どうにも成らない。後人は、この話を聞いて、口口に言ひ傳へて居るが、孔子のやうな物の善く分つた人は、すでに亡びて、今は何事も分らない愚鈍な連中ばかり居るから、これを聞いても、同情を寄せて、涙を出すものがない。われ、李白も、丁度その通りで、一生不遇であつたが、誰も隱惜するものなく、そして今や愈よ斯世と別れるのである。

【餘論】蕭子贊は「この詩、太白自ら嘆ずるの辭なり」といひ、王琦は「詩意謂ふ、西狩して麟を獲るや、孔子これを見て涕を出す。今、大鵬、中天に摧かるる時に、孔子なく、遂に人の爲に涕を出すものあるなし。己の時に遇はず、しかも、人の之が爲に隱惜するものなきに喩ふ。太白、かつて大鵬賦を作り、實は以て自ら喩ふ、故に此歌復た大鵬を借りて、以て寓言するか」といつた。

古意

古意

君爲女蘿草。妾作兔絲花。

君は女蘿の草たり。妾は兔絲の花と作る。

輕條不自引。爲逐春風斜。

輕條、自ら引かず、爲に春風を逐うて斜なり。

百丈託遠松。纏綿成一家。

百丈、遠松に託し、纏綿、一家を成す。

誰言會面易。各在青山崖。

誰か言ふ、會面易しと、各、青山の崖に在り。

女蘿發馨香。兔絲斷人腸。

女蘿は馨香を發し、兔絲は人腸を斷つ。

枝枝相糾結。葉葉竟飄揚。

枝枝相糾結し、葉葉竟に飄揚す。

生子不知根。因誰共芬芳。

子を生むも根を知らず、誰に因つてか芬芳を共にせむ。

中巢雙翡翠。上宿紫鴛鴦。

中には巢ふ雙翡翠、上には宿す紫鴛鴦。

若識二草心。海潮亦可量。

若し二草の心を識らば、海潮も亦た量るべし。

【字解】【一】女蘿、兔絲、前に見ゆ。【二】輕條、細い蔓。【三】糾結、からみ合ふ。【四】二草、女蘿・兔絲を指す。【五】海潮、海水に同じ。

【題義】楊齊賢の解に「爾雅に云ふ、女蘿は兔絲なり。毛詩に、葛與女蘿、施于松柏。陸機の詩疏に、草に在るを兔絲といひ、木に在るを松蘿といふ、松蘿は松に蔓うて生じ、枝正に青し、兔絲は草上に蔓聯し、その赤きこと金の如く、松蘿と殊に異なり。又長歌行に、女蘿亦有託。呂氏春秋に、或は謂ふ、兔絲は根なくして地に屬せず、茯苓是れなり。抱朴子に、兔絲の草、下に伏兔の根あり、この

兎なければ、絲上に生ずるを得ず、然れども、實は屬せざるなり。古詩に曰く、與君爲新婚、兎絲附女蘿、張昇が仙彦堅に與ふる書に曰く、纏綿たる恩好。盧子諒が劉琨に贈る詩に、綿綿女蘿、施于松標、こゝにあつて、女蘿と兎絲との關係は、諸家の説、一定せざれども、兎に角、親密緊接の者としてある。そこで、李白は、古來から傳承せる意に本づいて、この詩を作つたから、古意を以て、題に命じたのである。

【詩意】君は女蘿の草であるし、妾は兎絲の花である。兎絲の細い蔓は、自分で生長する譯には行かず、春風を逐うて、はじめて斜に伸びて行くのである。かくて、兎絲の蔓は、百丈の長きに及び、遠くに生えて居る松の木に絡み付き、女蘿とともに、纏綿として、さながら一家の如くなつて居る。しかし、各、青山の斷崖のやうな處に伸びて往つて居るから、互に會面することは容易ではない。女蘿は、馨香を發し、兎絲は、しなやかな風情をして、人腸を斷たむとし、兩者ともに、枝と枝とは絡み合ひ、葉と葉とは、一所に飄つて居る。そこで、實が出来た處で、女蘿のやら、兎絲のやら、一寸分かり悪い位で、この二草は、誰に因つて芬芳を同じうするのであるか。兩者ともに、かくの如く親密なる處から、その枝の中間には、二羽の翡翠が巢を結び、枝の上には、鴛鴦が番をなして宿して居る。人もし、この二草の深き契の心を解し得たならば、底ひ知らぬ大海と雖も、容易に量ることも出来やう。つまり、この二草の相倚つて互に生命と爲せるは、まことに深い意義があるので、これを解

することは、大海の水を量るよりも六つかしい。

【餘論】女蘿と兎絲とは、無論、夫と妻とに喩、たので、相倚つて一つ家に居り、そして、夫は外を治め、妻は内を治め、子を生むも、無論、兩者共有である。ここが、即ち比擬精當な處で、結末二句はこれを讚美して、極めて餘情がある。これは、古來の因襲的詩想を其儘繼承したのであるが、その筆は、細かい處に互つて居て、自然に陳意翻新の妙がある。

山鷓鴣詞

山鷓鴣詞

苦竹嶺頭秋月輝 苦竹嶺頭、秋月輝き、

苦竹南枝鷓鴣飛 苦竹の南枝、鷓鴣飛ぶ。

嫁得燕山胡雁婿 嫁し得たり、燕山胡雁の婿。

欲銜我向雁門歸 我を銜んで、雁門に向つて歸らむと欲す。

山雞翟雉來相勸 山雞翟雉、來つて相勸む、

南禽多被北禽欺 南禽、多くは北禽に欺かる。

紫塞嚴霜如劍戟 紫塞の嚴霜、劍戟の如く、

歌吟 山鷓鴣詞

【字解】一 苦竹嶺 江南通志

に「苦竹嶺は、池州に在り、李白、かつて書を此に讀む」とある。

二 雁門 題義の項に詳し。

三 雁門 水經註に「山海經に曰く、雁門の水は、雁門の山より出づ、雁、その間に出づ、高柳の北に在り、高柳は代中に在り、その山、重巒疊嶂、霞舉雲高、連山隱隱、東、遼塞を出づ」とある。

四 山雞 劉淵林三都賦の註に「山雞は、雞の如くして黒色、樹に棲んで晨に鳴く、今

蒼梧欲巢難背違。蒼梧巢はむと欲す、背違し難し。

我心誓死不能去。我が心、死を誓つて去ること能はず、

哀鳴驚叫淚沾衣。哀鳴驚叫、涙衣を沾す。

謂はゆる山雞は、鶩夷なり、合浦に之あり」といひ、禽經に「首に彩毛あるを山雞といふ」とあつて、張華の註に「山雞は長尾、尤も之を珍護す、林木の森鬱たる者には

入らず、その尾に觸れむことを恐るるなり。雨ふれば、巖石の下に避く、濡濕を恐るるなり。久雨、亦た出でて食を求めず、死者甚だ衆し」とあり、水經註に「鷓鴣は、山雞なり、光色鮮明、五色炫耀、利距善闘ふ。世、家雞を以て之を闘はす、すなはち擒にすべきなり」とある【五】翟雉 博物志に「翟雉長尾、雨雪降れば、その尾を惜み、高樹の杪に棲み、致て下つて食せず、往往にして餓死す」とある。【六】紫塞、蒼梧、ともに前に見ゆ。

【題義】王琦の解に「教坊記に、山鷓鴣は是れ曲名、鄭谷の詩に、座中亦有江南客、莫向清風唱鷓鴣」と。知る、山鷓鴣は、乃ち當時南地の新聲なるを」とある。それから、鷓鴣は、詩を作る手合

こそ、時時勝手に詩中に入れるが、日本には、絶對に居ない鳥で、支那でも、南方の暖地に限られて居る。太平廣記に「鷓鴣は、吳楚の野、悉く有り、嶺南、偏に多し。臆前に白圓點あり、背上に紫赤毛を間ふ。その大、野雞の如く、多く對して啼く」といひ、南越志に「鷓鴣は、東西回翔すと雖も、然れども、翅を開くの始、必ず先づ南に翥び、その名、自ら杜簿州と呼ぶ」といひ、又本草に「自ら鉤輅格磔と呼ぶ」といひ、李羣玉の山行聞鷓鴣の詩に、方穿詰曲崎嶇路、又聽鉤輅格磔聲とある。それから、王琦の説に「この詩は、當に南姬嫁して北人の婦となるものあり、悲啼死を誓つて肯て去

らず、太白見て之を悲み、遂に此詩を作るなるべし」とあるが、大方さうであらう。その後、この詩が大に世に行はれ、その遺音が長く存して居たから、鄭谷の詩も出来たのであらうと思はれる。

【詩意】苦竹嶺頭に、秋の月、冴えて輝くとき、山の名にしおふ苦竹の南枝から、鷓鴣が飛び起つた。

この鷓鴣は、今や燕山の胡雁を婿とし、これに嫁ぎ、やがて、連れられて、北の方、はるかに雁門に向つて往かうとして居る。すると、山雞だの、翟雉だのいふものが来て、勧めていふには、從來、南禽は多く北禽に欺かれて、しまひに憂き目を見たので、お前が今燕山の胡雁に嫁ぐといふが、どうせ碌なことでは無からうから、よした方が善いといつて、しきりに其行を止めた。おもへば、長城の邊は、極めて寒く、霜はきびしくして、身にこたへることは、さながら劍戟を以て刺されるやうであるし、従前蒼梧に巢うて、ここに長く留まつて居やうと深く念じて居たので、これにも背く譯にも行かず、そこで、わが心には、死を誓つて、ここより去ることは出来ない。かくて、哀しげに鳴き、驚いて叫んで居るので、聞くものをして、覺えず、涙下つて衣裳を濕さしめるばかりである。

歷陽壯士勤將軍名思齊歌并序

歷陽の壯士勤將軍、名は思齊の歌、并に序

歷陽壯士勤將軍。神力出于百夫。則天太后召見奇之。授遊擊將軍。

賜錦袍玉帶。朝野榮之。後拜橫南將軍。大臣慕義結十友。即燕公張說。館陶公郭元振爲首。余壯之。遂作詩。

【訓讀】 歴陽の壯士勤將軍、神力、百夫に出づ。則天太后、召し見て、これを奇とし、遊撃將軍を授け、錦袍玉帶を賜ひ、朝野これを榮とす。後、横南將軍に拜せらる。大臣、義を慕ひ、十友を結ぶ、即ち燕公張說、館陶公郭元振を首と爲す。余、これを壯とし、遂に詩を作る。

【字解】 一 歴陽郡 唐の和州、淮南郡に隸し、古しへの揚州の地域である。二 遊撃將軍 五品以上の武散官。三 張說 字は道濟、洛陽の人、武后の時に相となり、玄宗の時、再び相となつて、燕國公に封ぜられた。四 郭元振 名は振、魏州の人、字を以て顯はる。睿宗の時、相となつて、館陶縣男に封ぜられ、後、又代國公に封ぜられた。

【序意】 歴陽郡出身の壯士勤將軍といふ人は、不思議な強力で、百人の上に傑出して居る。そこで、則天太后は、召して、拜謁を仰せつけられ、これを奇として、遊撃將軍の職を授けられ、錦袍玉帶を賜はつたから、朝野これを榮とした。その後、横南將軍に拜せられた。その頃、朝廷の大臣中、この人の義を慕ふものが多く、因つて、十友といふ團結をなし、燕公張說、館陶公郭元振の二人が、その筆頭であつた。そこで、予は、勤將軍の人と爲りを壯とし、遂に此詩を作つた。

【餘論】 王琦の説に「勤將軍の名、史冊に載せず、然れども許渾集を考ふるに、勤尊師歴陽山居に題するの詩あり、序に云ふ、師即思齊之孫と。然らば、その名、亦た一時を震耀するもの、楊升菴の述

希姓に之を引き、勤思齊に作るは誤なり」といつて居る。

太古歴陽郡。化爲洪川在。

江山猶鬱盤。龍虎祕光彩。

蓄洩數千載。風雲何靈霽。

特生勤將軍。神力百夫倍。

【字解】 一 化爲洪川 搜神記に「歴陽の郡、一夕淪んで地中に入つて、水澤となる。今の麻湖、是れなり」といひ、述異記に「和州歴陽、淪んで湖となる。むかし、書生あり、一老姥に遇ふ、姥、これを待つこと厚し。生、姥に謂つて曰く、これ縣門の石龜の眼より血出づれば、この地、當に陥つて湖となるべし」と。姥、後數ば往いて之を視る、門吏、姥に問ふ、姥、具に之に答ふ、吏、硃を以て龜眼に點す、姥、見て遂に走つて北山に上る、願れば、城、遂に陥る。今、湖中に明府魚、奴魚、婢魚あり」といつて居る。

【詩意】 太古の歴陽郡は、地が陥没して、大きな水澤となつた處であるが、江山は猶ほ鬱盤として、その四境をめぐり、龍虎は、光彩を祕して、その内に潜んで居る。かくて、風雲の氣は、或は蓄へたり、或は洩れたりしたが、數千載の久しきに互り、依然として、こんもりと立ち籠めて居る。さすがに、地靈は、かくの如く鬱積の餘、ここに、勤將軍といふ人を生ぜしめ、その神力は、百夫に倍する

位、まことに見ると、人間希に見るところで、この人は取りも直さず、歴陽風雲の氣の凝り成したものであ

【餘論】蕭士贇は、この詩を以て、太白の手筆に非ずとした。なほ、其詳は、次詩の餘論中に述べる

草書歌行

草書歌行

少年上人號懷素。

少年の上人、懷素と號す、

草書天下稱獨步。

草書、天下、獨歩と稱す。

墨池飛出北溟魚。

墨池飛び出づ北溟の魚、

筆鋒殺盡中山兔。

筆鋒殺し盡す中山の兔

八月九月天氣涼。

八月九月、天氣涼しく、

酒徒詞客滿高堂。

酒徒詞客、高堂に滿つ。

賤麻素絹排數箱。

賤麻素絹、數箱に排し、

宣州石硯墨色光。

宣州の石硯、墨色光る。

【字解】(一) 墨池 法書要録

に「弘農の張芝、草書を善くす。

池に臨んで書を學び、池水盡く黒

なり」といひ、太平寰宇記に「墨

池は、王右軍の洗硯池なり、舊宅

と并せて、蕺山の下に在り、會稽

縣を去ること二里餘」といひ、方

輿勝覽に「紹興府戒珠寺は、本と

王羲之の故宅、門外に二池あり、

墨池鵝池といふ」とある。されば、

墨池は、張芝にも、王羲之にも有つ

て、このは、いづれとも分らぬ。

【三】中山 元和郡縣志に「中山は宣

州深水縣の東南十五里に在り、硯

毫を出す、筆を爲る精妙」とある。

【三】賤麻素絹 賤は紙。麻は麻を

材料として漉いた紙で、即ち麻紙。

素絹ともに絹、至つて下なるもの

を絹といひ、絹の精白なるものを

素といふ。【四】繩牀 王琦の解

に「繩牀は、板を以て之を爲り、

人、その上に坐す。その廣さ、前

に膝を容るべし。後に靠背あり。

左右に托手あり、以て臂を擱くべ

し。その下、四足地に著く」とあ

る。【五】湖南七郡 湖は洞庭で、

七郡は、長沙・衡陽・桂陽・零陵・

連山・江華。邵陽の諸郡を云ふ。

【六】王逸少 世説註に「文字志

に曰く、王羲之、字は逸少、琅琊

吾師醉後倚繩牀。

吾が師、醉後、繩牀に倚り、

須臾掃盡數千張。

須臾にして掃ひ盡す數千張。

飄風驟雨驚颯颯。

飄風驟雨、驚いて颯颯、

落花飛雪何茫茫。

落花飛雪、何ぞ茫茫。

起來向壁不停手。

起ち來つて、壁に向つて手を停めず、

一行數字大如斗。

一行數字、大、斗の如し。

怳怳如聞神鬼驚。

怳怳として、神鬼の驚くを聞くが如く、

時時只見龍蛇走。

時時只だ龍蛇の走るを見る。

左盤右蹙如驚電。

左盤右蹙、驚電の如く、

狀同楚漢相攻戰。

狀は楚漢の相攻戰するに同じ。

湖南七郡凡幾家。

湖南の七郡、凡そ幾家、

家家屏障書題徧。

家家の屏障書題徧ねし。

王逸少張伯英。

王逸少、張伯英、

古來幾許浪得名。古來幾許か浪りに名を得たる。

張顛老死不足數。張顛、老死して、數ふるに足らず。

我師此義不師古。我が師、この義、古しへを師とせず。

古來萬事貴天生。古來、萬事、天生を貴ぶ、

何必要公孫大娘。何ぞ必ずしも公孫大娘、渾脫の舞を要

渾脫舞。せむや。

刺史右軍將軍會稽內史に累遷す」とある。【七】張伯英、後漢書に「張芝、字は伯英、草書を善くす」とある。衛恆の四體書勢に「漢興つて、草書あり、作者の姓名を知らず、章帝の時に至つて、齊相杜度あり、號して善く篇を作ると稱す。後に崔瑗、崔寔あり、亦皆工と稱す。杜氏は、結字甚だ安くして、

書體微に瘦す。崔氏は、甚だ筆勢を得て、結字少しく疎。弘農の張伯英は、因つて、轉じて其巧を精にす。凡そ家の布帛、必ず書して後に之を練る。池に臨んで、書を學び、池水盡く黒し。筆を下せば、必ず楷を爲り、すなはち常に曰く、匆匆草書に暇あらずと。寸紙も遺されず、今世に至りて、尤も其書を寶とす。韋仲將、これを草聖といふ」とある。【八】張顛、國史補に「張旭の草書、筆法を得たり。後に崔邈、顔真卿に傳ふ。旭言ふ、はじめ、吾、公主擔夫の路を争ふを見て、筆法の意を得たり。後、公孫氏の劍器を舞はすを見て、その神を得たり」と。旭、飲んで醉ふや、輒ち草書し、筆を揮つて大叫し、頭を以て水墨中に搥して之を書す。天下、呼んで張顛となす。醒後、自ら視て、神異復た得べからずとなす。後輩、筆札を云ふもの、歐虞褚薛、或は異論あり、張長史に至つては、問言なし」といひ、舊唐書に「吳郡の張旭、草書を善くし、酒を好む。醉後ごとに、號呼狂走、筆を索めて揮洒し、變化窮まりなく、神助あるが若し。時人號して張顛となす」といひ、杜甫の觀公孫大娘弟子舞劍行の序に「開元三載、予、尙孩童穉、記す、郾城に於て、公孫氏の劍器渾脫を舞はすを觀る、瀏離頓挫、ひとり出でて時に冠たり。高頭、宜春、梨園二教坊の内人より、外、供奉に及ぶまで、この舞を曉るものは、聖文神武皇帝の初、公孫一人のみ。往時、吳人張旭、草書帖數を善くす、かつて郾縣に於て、公孫大娘の西河劍

器を舞はすを見、これより、草書長進、豪蕩感激」とある。【九】公孫大娘 上に見ゆ、又樂府雜錄に「開元中、公孫大娘あり、善く劍器を舞はす。僧懷素、これを見て、草書遂に長ず、蓋しその頓挫の勢に准するなり」とある。【一〇】渾脫 唐時の舞の名。

【題義】草書歌行は、懷素に贈つたのである。懷素は、名高い書家であるが、元來どういふ人かといへば、國史補に「長沙の僧懷素、草書を好み、自ら草聖三昧を得たりと言ふ。棄筆堆積、山下に埋め、號して筆塚といふ」といひ、周越の法書苑に「顔魯公、懷素と同じく草書を鄔兵曹に學ぶ。或は問ふ張長史、公孫大娘が劍器を舞はすを見、はじめ、低昂回翔の狀を得たりと。兵曹之ありやと。懷素、古錢脚を以て魯公に對して曰く、屋漏の痕に何如と。魯公復た問ふ、師は何の得るところぞ。曰く、夏雲奇峰、反壁折路を觀ば、當に之を師とすべし」といひ、宣和書譜に「釋懷素、字は藏真、俗姓は錢、長沙の人、家を京兆に徙す、玄奘三藏の門人なり。はじめ、律法を勵み、晚に意を翰墨に精しうし、追倣して輟まず。秃筆、冢を成す。一夕、夏雲の風に隨ふを見、頓に筆意を悟る。自ら謂ふ、草書三昧を得たり、と。これ亦た其用心分たず、乃ち神に凝るを見るなり。當時の名流、李白、戴叔倫、竇衆、錢起の徒の如き、擧つて皆詩あり、これを美す。その勢を狀するや、以爲へらく、驚蛇走虺、驟雨狂風の若しと。人以て過論と爲さず。又評者謂ふ、張長史は顛たり、懷素は狂たりと。その晩年、益す進む。すなはち、復た評すらく、その張芝と鹿を逐ふ、これ亦た加ふるあつて已むなしと。故にその之を譽むるもの、亦た是の若きか。その平日を考ふるに、酒を得て興を發し、要するに、字

字飛動せむと欲す。圓轉の妙、宛として、神あるが若し」といひ、一統志に「懷素は零陵の人、二王の眞跡、及び二張の草書を觀て之を學び、漆盤に書し、三面ともに穴、これに歌を贈る者三十七人、皆當世の名流。顏眞卿、序を作る」とある。要するに、懷素は、張旭と相竝んで、筆札の妙、一世を震動した名人であつて、李白の此詩は、即ち其人に贈つたものと稱せられて居る。

【詩意】 少年の僧にして、懷素と號する人があるが、その草書の妙は、天下獨歩と稱せられ、墨池の中よりは、變化測られざる北溟の鯤魚を飛び出さしめ、その筆鋒の鋭きことは、世に比なく、名だたる中山の兔を殺し盡し、特に精選したものと稱せられて居る。時正に秋、八月九月の天氣涼しき頃、懷素の住める草庵には、酒徒詞客と稱する手が寄り集まつて、各その字を乞ひ、紙箋だの、麻紙だの、上等、下等の緋の種類は、數箇の箱に一ぱいで、これは、皆依頼者が置いて往つたものである。そこで、宣州の石硯で墨を磨り、黒く光つて見える位、そこで、懷素は、繩牀に倚りかかつて居て、得意に其筆を揮ひ、しばらくの間に、數千枚を書きなぐつて仕舞ふので、その早きことは、飄風驟雨の驚いて颯颯たるが如く、落花飛雪が茫茫として空に吹きめぐるが如くである。それから、やをら身を起し、壁に向つて直立したる儘、手を停めず、一氣呵成に書き下ろしたるものを何かと見れば、一行數字で、その字の大きさは、斗の如く、それが如何にも見事に出來て居て、悦悦として、鬼神の驚いて走る其聲を聞くが如く、時としては、龍蛇の走つて行くを見るが如く、まさしく、入神の妙を極めたものである。

懷素の草書は、これを一概して、左に盤り、右に蹙まり、さながら電光の縦横に閃くが如く、又その紛拏錯互せるは、楚漢の軍が互に鎬を削つて、攻戦するが如くである。懷素は、もと長沙零陵の人であるから、その名は、殊に洞庭附近に高く、湖南七郡の家、幾千萬あるか知らぬが、家家の屏風衝立は、皆この人の書いたもので、その聲價一時に高きこと、以て概見すべきである。おもへば、かの王羲之の如き、張芝の如き、皆書を善くするといふ評判であるが、仔細に考ふれば、なほ聊か其實と相副はぬ處もあつて、浪りに虚名を得たものといふべく、とても、我が懷素には敵はない。最近には、張旭といふものがあつて、草聖の稱を擅にしたが、これも、年を取つて死んで仕舞ひ、懷素に比ぶれば、もとより物の數でもなかつたので、懷素の草書に於ける、全然、その獨得に係り、斷じて古しへを師奉するものではない。むかしから、人間の事は、天生、即ち自然に妙を得るといふことを貴ぶので、何も必ずしも、公孫大娘の渾脱の舞を觀て、それから悟入するにも及ばない。これを要するに、懷素の技は、これを天に得たもので、當代に傑出し、終古に敵なきも、如何さま、尤もな事と頷かれる。

【餘論】 蘇東坡は、この篇を評して「草書歌は、決して太白の作るところに非ず、乃ち唐末五代、禪月に效うて、しかも及ばざるもの」といひ、且つ、その賤麻絹素排數箱の句、村氣掬すべきを嘗つた。ここに謂ふ禪月は、即ち僧貫休の法號である。次に墨池篇には「この詩、本と藏眞の自作、名を太白

に駕するもの」とあるが、世に懷素ともあらうものが、如何に世評を博せむが爲めとはいへ、かくまで自分を譽め立てて、わざわざ詩にまで作ることも無からうと思はれるので、若し實際、さうだとすれば、折角の天才も、氣の毒ながら、賣名の小豎に過ぎぬことに成つて、その人格を臺なしにして仕舞ふ。蕭士贇は「草書歌、先儒、太白の作に非ずといふ。予謂へらく、勳將軍歌も、亦た他人の者、就釐して、これを卷尾に置き、復た増註せず」といひ、王琦は「一の少年上人を以てして、故らに王逸少、張伯英を貶し、以て之を推獎す、大に毀譽の實を失ふ。張旭に至つては、太白と既に酒中八仙の遊を同じうし、しかも、詩を作つて稱詡し、胸藏風雲世莫知の句あり、忽ち一旦にして、その老死して數ふるに足らざるを譽る。太白、決して、没分別、ここに至らず、斷じて、僞作たること、信に疑はず」といつて、その議論、さすがに精當である。

和盧侍御通塘曲

盧侍御の通塘曲に和す

君誇通塘好。通塘勝耶溪。

君は誇る通塘の好きを、通塘は耶溪に勝れり。

通塘在何處。遠在尋陽西。

通塘、何の處にかある、遠く、尋陽の西に在り。

青蘿嫋嫋挂煙樹。

青蘿嫋嫋として、煙樹に挂り、

白鵬處處聚沙隄。

白鵬處處、沙隄に聚まる。

石門中斷平湖出。

石門、中斷して、平湖出で、

百丈金潭照雲日。

百丈の金潭、雲日を照らす。

何處滄浪垂釣翁。

何處の滄浪か釣を垂るるの翁、

鼓棹漁歌趣非一。

鼓棹、漁歌、趣、一に非ず。

相逢不相識。出沒繞通塘。

相逢うて相識らず、出沒して通塘を繞る。

浦邊清水明素足。

浦邊の清水、素足明かに、

別有浣紗吳女郎。

別に浣紗の吳女郎あり。

行盡綠潭潭轉幽。

綠潭を行き盡して、潭、轉た幽なり、

疑是武陵春碧流。

疑ふらくは、是れ、武陵春碧流。

秦人雞犬桃花裏。

秦人の雞犬、桃花の裏。

將比通塘渠見羞。

將に通塘に比せむとすれば、渠羞ぢられむ。

通塘不忍別。十去九遲廻。

通塘、別るるに忍びず、十去九たび遲廻。

偶逢佳境心已醉
 忽有一鳥從天來
 月出青山送行子
 四邊苦竹秋聲起
 長吟白雪望星河
 雙垂兩足揚素波
 梁鴻德耀會稽日
 寧知此中樂事多

偶ま佳境に逢うて、心、すでに酔ふ、
 忽ち一鳥の天より來るあり。
 月は青山に出でて、行子を送る、
 四邊の苦竹、秋聲起る。
 白雪を長吟して、星河を望む、
 兩足を雙垂して、素波を揚ぐ。
 梁鴻德耀、會稽の日、
 寧ろ知らむや、此中樂事の多きを。

【字解】一 耶溪 即ち若耶溪、前に見ゆ、會稽縣南二十五里に在り、その水北流して鏡湖と合す。【二】白鷗 鄭樵の爾雅註に「白鷗は、鷗に似て大、白色紅臉愛すべし」とある。【三】金潭 潭は水の深澄澈清なるもの、下に金沙あり、故に名づく。【四】鼓棹 棹は楫、舟の傍に在り、水を撥して舟を進むるもの。一説に、短きものを楫、長きものを棹といふとある。【五】武陵 前に見ゆ。【六】白雪 曲の高きをいふ、前に見ゆ。【七】梁鴻德耀 後漢書に「梁鴻、東して關を出づるに因つて、京師を過ぎ、五噫の歌を作る。肅宗、聞いて之を非とし、鴻を求むれども得ず、乃ち、姓を運期、名を耀、字を侯光と易へ、妻子と齊魯の間に居り、しばらくあつて、又去つて吳に適き、大家臯伯通に依つて廡下に居り、人の爲に賃春す。歸る毎に、妻、爲に食を具へ、敢て鴻の前に於て仰ぎ視す、案を擧げて、眉に齊しうす、伯通察して、これを異として曰く、彼の庸、能く妻を敬せしむることは是の如し、凡人に非ざるなり、

と。乃ち方に家に含す。鴻、潜に閉ぢ、書十餘篇を著す」とある。【八】會稽 王琦の説に「梁鴻、適くところの地は、今の蘇州に在り、蓋し其地古しへ吳國に屬し、秦には會稽郡に屬し、漢、その舊に依つて改めず、後漢の順帝永建四年に至つて、はじめて、分つて吳郡を置く。鴻、肅宗の朝に在り、尙ほ未だ吳郡の名あらず、史官、古しへの國名に本づいて言ふ、故に吳といふ。上の齊魯と一例の通稱。太白は、その本時の郡を指して云ひ、すなはち會稽といふ、乖異に似たれども、實は相妨げざるなり」とある。

【題義】通塘は、地誌類にも見えぬやうで、諸家の註にも、一向引いてない。しかも、詩中に尋陽西とあるから、江州、即ち今の九江附近であると見える。盧侍御も、如何なる人か、その名さへ分らな

い。この詩は、侍御の盧某が通塘曲を作つて、李白に見せたから、李白は之に和して作つたのである。【詩意】君は通塘の風景の好きことを誇つて、若耶溪にも勝つて居るといはれた。さて、通塘は何處に在るかといへば、尋陽の西に在つて、青い蘿は嬋嬋として、煙にまがふ密樹に垂れかかり、白鷗は沙隄の上で、處處に集まり、浮世を離れて、風光極めて幽邃な處である。そこには、石門があつて、真中から裂け、そこから湖水が見え、その湖邊には、水底の金沙かかやく深い淵があつて、深さ百丈に及び、雲日を照らして居る。ここに、滄浪の歌でも歌ひさうな漁父が、どこからか此に來て、釣を垂れ、或時は櫓をこいで舟を進め、或時は、漁歌を唱へつつ、その趣は、一ならずして、數は變つて行く。この漁父は、何處の者か、相逢ふも相識らざれども、出沒して、通塘を繞つて居る。ここに又、薄い紗を洗ふ吳の少女どもが居て、浦邊の清水に臨み、その白い足は水に映つて、はつきりと見える。かくて、漁翁だの、浣紗の女郎だの居る處の綠潭を行き盡して、更に湖岸を辿り行くと、隨

處の深い淵は、愈よ幽邃に見え、武陵の春の流の碧に澄めるのでは無いかと疑はれる位。しかし、その景色は、一段とすぐれて居るから、秦人が雞犬と共に住んで居た彼の桃花源を以て、この通塘に比したならば、とても、及ばないといつて、桃花源の方で、羞ぢ入るであらう。通塘は、かういふ處で、自分も、しばらく此に淹留して居たから、今こより他處に往かうとすると、十たび去つて、九たび遅回し、あと戻りをする位で、到底別るるに忍びない。そのみならず、偶然佳境を探りあてて、心、すでに酔はむばかり、仍つて、ここに留まつて居ると、忽然として、一鳥、天より飛び來り、われに對して、慰め顔に見える。やがて日が暮れると、月は青山より出でて、さながら、旅行く人を送るが如く、四邊の苦竹は風ならぬに、さわさわと音して、淋しき秋の聲が起つた。かくて、白雪に比すべき一曲を長吟しつつ、夜の空に白く横ふ天の河を望み、舟べりに腰をかけて、ぶらり兩足を垂れたまま、清い波を揚げた。むかし、梁鴻は、その妻の徳耀とともに、その終焉まで、會稽に隠れて居たが、この通塘の中の樂事多きには、とても及ばぬであらう。通塘の地は、もとより隱者の盤旋するに適し、その風景も殊に優れて居る。

【餘論】起首より將レ比ニ通塘ニ梁見差に至るまでは、通塘の風景を敘し、その中に漁郎と女郎とを點出して、大に風情を添へたのは、まことに巧妙な手段である。通塘不レ忍レ別より以下は、自分が今その地を去らむとする時の情思を寫したので、餘波として、更に觀るべきものがある。

昭和三年三月三十一日印刷
昭和三年四月三日發行

續國譯漢文大成 文學部第一卷

【非賣品】

著者權所有

編輯者兼	國民文庫刊行會
右代表者	東京市神田區小川町一番地 鶴田久作
印刷者	東京市本郷區西片町十番地 渡邊一郎
印刷所	東京市小石川區西古川町廿五番地 中外印刷株式會社

發行所

電話神田一八五三三五番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

圖書集成
卷之八
三
圖書集成
圖文和什行會

香齋書目

目錄	卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目	香齋書目

香齋書目
卷之八
三
香齋書目

香齋書目
卷之八
三
香齋書目



